
コンビニ強盗のススメ。その3

青木弘樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コンビニ強盗のススメ。その3

【Nコード】

N5995I

【作者名】

青木弘樹

【あらすじ】

純とのりおはコンビニ強盗から足を洗い、真面目に働いていた。そこへ純の父の弟、尚之が突然、現れる。また純は偶然、飯島ありすとも出会う。この複数の出会いが巻き起こすドラマ。果たして偶然か、必然か、？

作：青木弘樹

「いやー、もうびっくりしましたよ。まさかあの平成のルパンに私が狙われるなんて」

村田桜子がインタビューに答えていた。幸い被害は、宝石数点と、衣類数点だけらしい。

「えっ？何で私が狙われたかですか？さあ、分らないですね。あ、そういえば前にブログで漫画のルパン三世が好きって書いたことがあるんですけど、関係ないですね」

笑顔で答える桜子。事務所としては、タレントのいい宣伝になるので、よしというところか。

しかしこれを受けて警察は、これまでの被害者がキブンヘブン関係者の家だということを発表することにした。もちろんキブンヘブン側に了解を得てのことだ。

「へえ。おっさん、例の平成のルパンいるだろ？今まで被害にあった家は全部キブンヘブン関係者の家らしいぜ」

「ほう。そうなのか」

「もしかして犯人はおっさんじゃないのか？」

「ははは、まさか。だいたいキブンヘブンに恨みがあるのは純君だろ？」

「そうだな」

「さてと、風呂にも入ったし、私はもう寝るよ」

「ほい。おやすみ」

そして数日が過ぎたある夕方。

「ただいま」

「おかえり」

「純、あさってから俺は仕事に行くからな」

のりおは純を呼び捨てにするようになっていた。

「そうなの？」

「ああ。パチンコ屋だ。まあ最初はアルバイトだけだな」

「そうなんだ」

「最初は年齢的に雇えないって言われたんだけどさ、どうにか頼み込んで雇ってもらった」

「そうか。けど別にお金ならまだけっこうあるしさ、働かなくても、
、、」

「駄目だよ。家に住ましてもらってるし、それは純のお金だし、それに使うばかりじゃなくなるばかりだろ？」

「まあそうだけどさ」

「とにかく、あさってから頑張るよ」

「、、、」

「どうした？」

「いや、なんか、昔おっさんが自殺しようとしていた頃とは、なんか雰囲気が違うなって、、、」

「そうか？多分、吹っ切れたのかもしれないな」

「吹っ切れた？」

「純に助けてもらったときは、正直よけいなことをするやつだと思っただけど、やっぱり人間生きなきゃな。そうしないと東京で働いている息子にも合わす顔がないし」

「そっか」

「純、ありがとう」

「な、何だよ急に、、、」

「君は命の恩人だ。コンビ二強盗も、確かに悪いことだけど、正直楽しかったぞ」

「おっさん、、、」

「じゃあ飯にしよう」

「そうだな。じゃあ今日は就職祝いに出勤でも取ろうぜ。美味しい中華料理の店、知ってた」

「中華か。いいね」

二人は親子のような関係になっていた。

さらに数日後。夜七時ごろ。のりおが仕事から帰ってきた。のりおは早番のときは夜七時ごろ、遅番のときは夜十一時ごろ帰ってくる。

「ふう、疲れたあ」

「あ、お帰り」

「おお純、ただいま」

「おっさん、俺、今日からバイト行くから」

「バイト？そうか。まさかコンビニじゃないよな？」

「違うよ。運転代行業者だよ」

「運転代行業者？ああ、タクシーみたいなやつだな」

「そう」

「そうか。うん。それがいい。真面目に働くのが一番だ」

「ネットビジネスもやめたし、とりあえずバイトで、週三日くらいからだけどさ」

「なんでもいいさ。働くことはいいことだ」

「夜九時出勤だから、これから覚えておいてくれよな」

「分かった。がんばれよ」

「ああ。まかしとけて」

二人は笑顔だった。と、その時、
”ガチャ”

突然、玄関のドアが開いた。そして人が入ってきた。

「やあ、赤木純一郎君だね？」

「！？」

二人は驚いた。突然入ってきたことにも驚いたが、その男はなん

とオペラ座の怪人のような仮面をかぶっていたのだ。服装はスーツ姿。

「な、なんですか？あなたは？」

のりおが聞いた。

「私は、、、今話題の平成のルパンです」

「！！」

純とのりおは驚いた。しかし、

「、、、なんてね」

そう言つと、男は仮面をはずし、素顔をさらした。

「あつ！あなたは！？」

純が言った。

「知っているのか純？」

のりおが聞く。

「いや、知らない、、、」

「と、、、」

のりおはガクツときた。

「あの、、、どなたですか？」

純が男に尋ねた。

「はじめまして、純君。私は君のお父さんの弟の赤木尚之だ」

「親父の、、、弟、、、さん？」

純は父に弟がいるのは知っていたが、若い頃にアメリカに渡り、ずっとアメリカに住んでいると聞かされていた。

「二年ほど前、日本に帰ってきてね。ちよつといろいろ調べてここを見つけたんだよ」

「そ、そうですか、、、」

「ところでこちらは？」

尚之はのりおについて尋ねた。

「ああ、この人は、、、」

三人はお互いの近況を話し合った。もちろんコンビ二強盗のことは言っていないが。

「なるほど。純君があなたを助けたのか」

「はい。彼は命の恩人ですよ」

「おおげさだよ、おっさん」

「いろいろあるな。人生は」

「はい」

「兄が死んだと知ったとき、私はとても悲しかった。それに腹立たしかった。兄は子供の頃、とても優しい人だったからね」

「そうですか、」

「まあでも元気そうでよかったよ」

「はい。なんとかやってますよ」

「のりおさんも、これからもいろいろあると思いますが、がんばってくださいね」

「ええ、がんばります。ところで尚之さんは今仕事は何を？」

「私ですか？英会話教室で働いています」

「なるほど。アメリカに長年住んでいたから、英語はペラペラですもんね」

「あ、じゃあ、そろそろ俺バイト行くよ」

「そうか、気をつけてな純」

「純君、悪いが家まで送ってくれないか？ここからそんなに遠くないところに住んでるんだ。無理ならかまわないが、」

「いいですよ。時間的にまだ間に合うだろうし」

「すまないな」

純と尚之は、車に乗った。尚之はアメリカで結婚したのだが離婚していた。子供は母親が引き取り、今は一人暮らし。

「いい人みたいだな。のりおさんは」

「ええ。真面目な人ですよ」

車内で会話する二人。

「純君、また家に遊びに行ってもいいかな？」

「もちろんですよ。あ、携帯電話の番号覚えておきますよ」

「ありがとう」

間もなくして、とあるマンションの前に着いた。なかなかいいマンションだ。

「ありがとう純君」

「いえ」

「純君、、、」

「なんですか？」

「今度君の家に行ったときは、、、とっておきのプレゼントを持っていくよ」

「?、、、」

「じゃあ、仕事がんばってな」

尚之は車を降りた。

「なんだろ？プレゼントって、、、。サンテンドーTSかな？」

純は少し気になりつつも、仕事に向かった。

数日後。

今日、純は仕事は休みだった。のりおは仕事。純は晩ごはんでも買おうと、近くのコンビニへと向かっていた。のりおは今日は遅番なので帰ってくるのは十一時を過ぎるだろう。

間もなくして純はコンビニ（ソンソン）に着いた。

「いらつしゃいませー」

お客の数は7〜8人。その中にいちゃついているカップルがいた。いや、いちゃついているというよりも男が女のほうにベタベタしているという印象だ。

（いるよなー、ああいう目障りなカップル、、、）

純は出来るだけそのカップルを見ないようにして、弁当を選んでいった。

数分してカップルはレジに行き、そして清算をして帰っていった。「さてと、ついでにビールでも買おうかなあ、、、」

純は弁当とビールとアイス（ピノ）を買った。どうやら純はピノが好きらしい。

「ありがとうございましたー」

純は店を出た。そして家へと歩いていった。しかしその途中、
「もう！いい加減にしてよ、けんじ」

「なんだよ、そんなに怒るなよ」

見ると、さつきコンビでいちやついていたカップルが喧嘩をしていた。そう。この二人は飯島ありすと佐野けんじだった。純はまだありすに気づいていなかったが。

「外ではベタベタしないで。誰かに見られたらどうするのよ！」

「なんだよ、有名人きどりか？どうせお前のことなんて誰も知りやしないよ」

「、、、」

ありすは怒ったようだった。

「なあ葉子、俺はお前が好きなんだよ。だから、、、」

「帰って、、、」

「えっ？」

「もう帰って」

「葉子、何を言って、、、」

「帰って!!」

ありす（葉子）は座り込み、目をつむり耳をふさいだ。

「葉子、、、」

ありすはけんじを無視していた。

「分かったよ。ったく、、、」

けんじはどこかへ行ってしまった。

「、、、」

一部始終を見ていた純は、ありすに話しかけてみた。

「あの、、、大丈夫ですか？」

「、、、」

ありすは純を見上げた。

「あれ？」

純は気づいた。

「え？まさか、、飯島ありす、、さん？」

「！？」

「飯島ありすさんですよ。」

純は驚いた。間違いない。飯島ありすだ。ほとんどそう確信していた。

「え、、ええ、そうです」

ありすは一瞬隠そうとしたが、自分を知ってくれている人がいることがうれしくて、思わず正体をさらしてしまった。

「すごい！こんな所で会えるなんて。実は俺あなたのファンで。ブログも見てますよ」

「あ、ありがとう」

ありすはうれしかったが、同時に気まずくもあった。

「かわいいなあ、実物のほうが断然かわいいですね」

「そう？ありがとう。うれしい」

ありすはだんだん気分がよくなってきた。

「あ、でも、さっきの人、、彼氏ですか？」

「え？いやその、、」

「いや、いいですよ。言わなくてもいいです。そりゃあ彼氏いますよ。こんなにかわいいんだから」

「、、、、」

「心配しなくても誰にも言いません。大丈夫。それでも口は堅いんです。でも脳みそはやわらかいですけどね」

「ふふふ、ありがとう」

「あの、ちょっと待っててもらってもいいですか？」

「え？」

「ほんの二三分。あ、よかったらこれ食べててください」

純はありすにピノを渡した。そしてさっき買い物したコンビニに走った。

「、、、、」

ありすはとりあえずピノを食べながら純を待った。そして数分後、

「はあはあ、すいません、はあはあ、お待たせして、、」

「いえ、そんなに急がなくてもよかったのに、、」

待っているうちに、ありすはピノを全部食べていた。

「ははは、えっと、、」

純はペンとメモ用紙を取り出した。どうやらこのふたつを買ったようだ。そしてメモ用紙に何かを書いた。

「よし」

そしてメモ用紙を一枚破り、ありすに渡した。

「あの、俺は赤木純一郎といいます。あの、、もし、、もし気が向いたら連絡下さい」

なんと純は自分の携帯電話番号とメールアドレスを書いてありすに渡した。大胆不敵なやつだ。

「、、、、」

ありすは迷ったが、連絡しないとしても、ファンがしてくれていることだ、ここで受け取らないわけにはいけない。

「えっと、、じゃあとりあえず、、」

ありすはメモを受け取った。

「ありがとう」

純は笑顔だった。純自身も連絡など来ないだろうと思っているが、万が一に賭けたのだ。

「あの、ところでピノお好きなんですか？」

「え？うん。ピノは大好き。特に抹茶味が最高だよ」

「抹茶味いいですよー。じゃあピノが食べなくなったら連絡ください。冷凍庫満タンにして待ってますんで」

「ふふふ、ありがとう。楽しみ」

ありすも笑顔だった。

「じゃあ俺は帰ります。またブログ見させてもらいますよ」

「ありがとう」

純は去っていった。聞きたいことは山ほどあったが、あまり詮索して嫌われたらいやなので、ここは我慢した。

「赤木純一郎さんか、、、」
「ありすも家へと帰っていった。」

数日後。

今日は純ものりおも仕事は休み。

「純、仕事どうだ？」

「うん。まあなんとかね。たまにすごいタチの悪い客いるけどな」

「そうだな。基本的に酔っ払いが相手だからな」

「おっさんはどう？」

「ああ、ぼちぼちだな。たまにすごいタチの悪い客いるけどな」

「、、、、いま、俺と同じこと言わなかったか？」

「ん？そうか？」

ふたりはまったりしていた。

純はありすとのことは言わなかった。そして当然、ありすから連絡など来ていない。当たり前だと思ったが、純は残念で仕方がなかった。

「しかし暇だな。テレビも全然面白くないし、、」

その時、純の携帯電話にメールが来た。純はメールを見てみた。

「！、、、何だ、、、これ？」

「どうした？」

見たこともないアドレス。そして本文はこうだった。

『たすけて　あり』

「これは、、、まさか、、」

純は思った。これは飯島ありすからのメールではないのか？純は険しい顔をしていた。

「どうしたんだ純？」

「い、いや、、」

その時、ふたたびメールが来た。

『双子橋』

「双子橋！？」

純は思わず叫んだ。

「くそっ！」

純は立ち上がり、すぐさま家を出て、双子橋のほうへと走った。

「純！」

のりおはよく分からなかったが、何かがあつたのだろと思った。

二十分ほどして双子橋の近くに着いた。

「どこだ、、向こう岸かも知れないな、、」

その時、

「離してよ！あなたなんかもう無理。やめて！」

どこからか声が聞こえる。純は声のする方向へと向かった。

「あっ！」

人の影がふたつ見えた。純は急いで向かった。

「葉子ー、頼むよー。ずっと一緒にいてくれよ」

けんじがありすに言い寄っていた。しかしけんじの様子がおかしい。目が普通じゃなかった。

「ありすさーん！」

純がふたりのところにたどり着いた。

「赤木さん！」

「はあはあ、ありすさん、大丈夫？」

「ええ、、ごめんなさい、、こんな時に、メールしちゃって、、」

「いいんだよ」

「なんだ？てめえは？」

けんじが純をにらむ。

「君はこないだの、、ありすさんの彼氏だな？」

「んん？ああそうだよ。葉子の彼氏だ」

「葉子、、？」

一瞬わからなかったが、純は理解した。おそらくありすの本名が葉子なのだろうと。

「とりあえず落ち着こう。なっ？」

「うるせえなあ。お前誰なんだよ？関係ないやつは引っ込んでろ」
けんじの様子は明らかにおかしかった。

「赤木さん、この人ね、警察官のくせにクスリやってるのよ！」

「クスリ!？」

純はクスリにも驚いたが、警察官であることにもっと驚いていた。
「本当か？」

「うるせえ！お前には関係ねえ！」

けんじの目はかなりやばかった。ありすは純の後ろに隠れていた。
純もまた、ありすを守るようにけんじに立ちはだかった。

「ありすさん、警察を呼ぼう」

「え？ええ」

「警察だあ？警察ならここにいるだろうが」

「お前みたいなのやつは警察じゃない！ありすさん、早く！」

「うん！」

「おっと待ちな。俺が警察だという証拠を見せてやるぜ」

けんじはそう言うのと、なんと拳銃を取り出した。

「!!」

純とありすは焦った。本物の拳銃を見たことはない。しかし相手は警察官。真正正銘、本物の拳銃だろう。

「へへへ、ちゃーんと弾も入ってるんだぜ」

「、、、」

純とありすは動けなかった。

「そ、そんなことをしても、、、結局捕まるぞ！」

「へへへ、そうかい。そうだな、なら葉子を殺して、俺も死ぬさ。
そしたら天国でずっと二人でいられる」

「、、、」

けんじはかなりおかしくなっていた。

「赤木さん、、、」

ありすは震えていた。

「とりあえず、お前は邪魔だから、先に死ねや」

けんじは純に拳銃を向けた。

(くそっ！どうすればいい！？)

絶体絶命のピンチ！純は動けなかった。そして、、

”パンッ”

銃声が鳴り響いた。

その4へ続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5995i/>

コンビニ強盗のススメ。その3

2010年10月8日15時06分発行